
ローマ大帝国

カオス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ローマ大帝国

【Nコード】

N0196H

【作者名】

カオス

【あらすじ】

自分の名前しか記憶の無いデイル・ゼレクスだが、目覚めたとき一人の少女と出会う。少女の名はフィス・セレント。成り行き上でフィスの為に行動を起こすデイルだったが……

「いつまでここで寝てるの？」

そう声が掛かった時にふと目が覚めた。

「お前は誰だ？」

「僕は、フィス・セレント。あなたは？」

フィスと名乗った子供は可愛い女の子？僕？フィスは何を言ってるんだ？

「僕って……男の子なの？」

「何言ってるの？僕は女の子だよ」

そうなのか……びっくりした。間違えたかと思った。そして、俺とは比べ物にならないような綺麗な服を着ている。俺はというと、腰に剣をさし、ぼろぼろの服を着ているだけだった。

「俺か？俺はデイル・ゼレクス。それにしてもここの教会の屋根は綺麗だな」

「僕はここの教会大好きなんだ」

「ステンレスガラスか。ここの人たちはいい物を使ってるんだな？」

「

「そうでもないよ。いい物を食べて、いい物を使ってるのは法王だから……」

「服も綺麗なものを着ているじゃないか」

「これは、法王の息子と許婚とするから身だしなみだけは整えとけて……僕は嫌なのにはここでは法王に刃向かったら『死刑』だから、みんな法王の所有物みたいになってるんだよ。僕は法王の息子なんて大っ嫌いなのに……」

フィスは顔を手で隠して泣き出し、そのままひざまずいた。

「大丈夫か？」

「うん。でも、今の法王は人を人として見てないよ」少ししゃくりあげながらフィスは立ち上がった。

「フィスはその法王の息子は嫌いなんだろう？」

「うん。大嫌い！ でも、明日になったら僕はお城の中に行かなくちゃいけない。僕は、僕は……」そこまで言うとなフィスはまたうずくまり泣き出してしまった。

「そうか。でも、好きでもないのにどうしてフィスはお城に行かなくちゃいけないんだ？ 逃げ出せばいいじゃないか」

「でも、逃げ出しても追っ手が来る！ 一生逃げ回らなくちゃいけないんだもん！ 無理だよ。守ってくれる人も居ないし……」

フィスがなんだか可哀想だ！好きでもない人間と一緒に暮らさなければならなんて間違ってる。

「お 俺じゃ駄目か？」

「そんな、今日会ったばかりの人を巻き込むなんて」

「もし、フィスが逃げ出したらフィスの親はどうなるんだ？」

「お父さんもお母さんも『同罪』になって『死刑』なんだよ」涙声が最後のほうは、つよくなりあまり聞き取れなかったがだいたいの言いたいことは理解できた。

「分かった。でもやっぱり納得いかねえ！ フィス！ 俺を連れて城に入れるか？」

「うん。でもどうして？」

「城に入って、法王を暗殺する」

「無理だよ！ 法王は護衛を十五人も雇ってるんだよ」

「へっ！ たったの十五人か何とかなるって。明日を楽しみにしてな！」

「うん。分かった。でも気をつけてね。捕まったら公開処刑になるから……」心配そうにフィスが覗き込む。

「大丈夫だって」微笑を浮かべながら答えてやる。フィスが心配しないように……。

「うん」まだ少し心配そうだ。

それから夜になるまで、抜け道を聞いたり念密な作戦を立てることになった。

「気をつけてね」

「おう！ 捕まらねえように注意する」それだけ言い残して俺は踵きびすを返して歩き出した。

それからしばらく歩くと城に着いた。抜け道を通り、法王の部屋まで到着。

「やっぱり十五人はちょっと固いか」などと小声で喋ってみる。
(さあ、行くか)

ダッ

「侵入者だ！」兵士が叫びながら剣を抜く。

「遅い！」俺は容赦なく切り捨てる。

ものの五分程度で応援に駆けつけた者も含め切り捨てた。せつかくの良い敷物が真つ赤な血と死体で濡れている。

俺は皇帝の寝室の扉に手を掛け開けるとそこには誰も居なかった。

「何故だ！ 皇帝は何処だ？」

皇帝を探すために部屋へ足を踏み入れると、後ろから応援部隊が山ほど来てしまっていた。

「くそっ これ以上ここに居ても埒が明かない」しかし引くわけにもいかなかった。

引いてしまえばフィスは明日ここに閉じ込められなければならないくなる。

「引けねえ」その言葉と同時に金属音が鳴り響く。

しかし大勢対一では分が悪い。

次第に俺の体は傷口が増えていく。

どうすれば勝てる？

その時、俺の利き腕に激痛が走った。

「グッ」しかし、俺は両手持ちだ。すかさず剣を振るう。

一人は切り捨てたものの、もう片方の腕に再度激痛が走り、捕まっ

てしまった。

その後、町の集会所まで連れられ、十字架に貼り付けられた。

ゴーン　ゴーン　ゴーン

夜の町に鐘が鳴り響くすると家の中から住民が出てきた。

「今から法王の暗殺を企んだ者を処刑する」それだけ言うと俺の下に火を放った。

フィスは居るのか？出来れば居ないでほしい。こんな姿は見られない！

探してみる……居た。母親らしき人物にしがみついて泣いている。

「ごめんな。フィス。約束守れなくて」

フィスが急に俺の所に走り始めた。

「来るな！」もし来たらフィスは反逆者扱いになるだろう。来させてはならない。

しかし、フィスは止まることなく俺の所に来ようとする。

「止まれ！来るな！」怒鳴り散らす。

それでもフィスは躊躇うことなく俺の足元にある火の中に飛び込んだ。

「ごめんね。ごめんね。僕のせいで……」フィスはしゃくり上げながら一生懸命謝っている。

「いいから、俺のことはいいから早く戻れ！」

「いやだ！僕のせいでデイルがこんな目に遭ってるんだもん」

フィスは離れずにその場に留まり続ける。

「お前まで死ぬことは無い！」

「い、いやだ！離れない！」頭を大きく振り、その場に留まり続けている。

「お前まで死ぬこと無いのに……約束守れなくてごめんな」

「そんなこと無い」そう言いながら、倒れていった。

ごめんなフィス・セレント……

次遭う時は楽しくゆっくり過ごせる世の中だといいな……

（後書き）

この作品は小説を書き始めて3作目に書いた作品です。

テストの時間内で作成した為、抜け落ちてる箇所また、足りない部分など大量にあります。今後修正を加えるかどうかは全く不明です。。。

ゴメンナサイ。

と言いますのも、この作品は五年位前に製作したもので、さすがにキャラクターを作成しなさいとキャラクターの動き・気持ちの変動が全く見えない為修正加えるかどうか考えあぐねてる状態です。ただ、この作品は初めて資料を使い作成しました。。。

と言う事で（ドウィウコトダ

メッセージなど下さると大変活力になりますのでぜひメッセージなど下さればと思つてます。。。

現在執筆中の作品はR指定なのですがもし読みたいと仰る方は探してみてくださいね^^

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0196h/>

ローマ大帝国

2010年10月20日18時46分発行